Meikai University Department of English

Recommended Reading for Eibei Students (Ver. 13)

教員の本棚シリーズ 4

推薦図書 2023

明海大学外国語学部英米語学科

英米語学科学生のための推薦図書（Ver. 13）

目次

1. はじめに……　3
2. 2023 年度 英米語学科教員……　4
3. 英米語学科教員による推薦図書……　5

1．はじめに

「英米語学科学生のための推薦図書」編集委員
福井　英次郎

人との出会いが人生を変えることがあるように、本との出会いが人生を変えることがあります。本を読むことは、新たな知識や価値観を得る機会でもあり、新たな感情や感性を知る機会でもあり、新たな友人を見つける機会でもあります。素敵な本と出会い、多くのことを考える機会としてほしいと考えています。

世の中には素晴らしい本が数多く存在しています。どの本から読もうかと悩んでしまうこともあるでしょう。もしそうだったら、これから紹介される本から始めてみてはいかがでしょう。この冊子では、専任教員が皆さんにぜひ読んでほしい本を推薦文とともに紹介しています。それらの本の多くは、図書館や推薦者の研究室に行けば借りることができるでしょう。ぜひ手に取ってみてください。

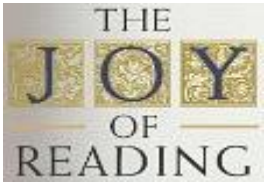
ジョン・ロックは「読書は単に知識の材料を提供するだけである。それを自分のものにするのは思案の力である」と説きました。たくさんの素晴らしい本を読み、たくさん考えて、豊かな人生の糧としてください。

＊2020年度から、この冊子の表紙に「専任教員の研究室の本棚」の写真を掲載しています。第 4 弾は、小谷哲男先生の本棚です。

2. 2023 年度 英米語学科教員

Fukui, Eijiro	福井 英次郎	(1721 研究室)
Kawahara, Shinichi	河原 伸一	(1714 研究室)
Kawanari, Mika	川成 美香	(1706 研究室)
Kotani, Tetsuo	小谷 哲男	(1620 研究室)
Kobayashi, Yasuko	小林 裕子	(1704 研究室)
Matsui, June-ko	松井 順子	(1723 研究室)
Mega, Yuko	妻鹿 裕子	(1624 研究室)
Nakamura, Keiko	ナカムラ ケイコ	(1720 研究室)
Shimada, Tamami	嶋田 珠巳	(1702 研究室)
Tastumi, Yuta	辰己 雄太	(1618 研究室)
Umetani, Hiroyuki	梅谷 博之	(1724 研究室)
Yokomizo, Yusuke	横溝 祐介	(1716 研究室)

-in Alphabetical order-



3. 英米語学科教員による推薦図書

福井　英次郎

☞高坂正堯（2017）『国際政治――恐怖と希望(改訂版)』（中公新書）

実際に手に取れることができ、読みやすい本を選ぼうと思い、新書から 3 冊を選びました。1 冊目は、高坂正堯の『国際政治』です。もとは 1966 年に出版されましたがその後に絶版となり、2017 年に改訂版が出版されました。登場する事例は古いですが、議論そのものは半世紀前に執筆されたとは思えないほど、国際政治の根幹を鮮やかに描いています。私は毎年、授業前の春休みにこの本を読み、自分の土台を振り返ることにしていますが、いつも新たな発見がある本でもあります。なお筆者の高坂は日本の国際政治学の礎を築いた研究者であると同時に、保守の論客として論壇を牽引しました。他にも多くの著作も残していますが、『古典外交の成熟と崩壊』『宰相吉田茂』『海洋国家日本の構想』(すべて中公クラシックス)なども、お薦めです。

☞細谷雄一（2012）『国際秩序――18 世紀ヨーロッパから 21 世紀アジアへ』（中公新書）

国際政治をより深く理解するためには、個々の事例を見るだけではなく、根底にある国際政治の構造を読み解く必要があります。この本は、均衡・協調・共同体の3つの原理に沿って、18 世紀の欧州から現在までの国際政治の構造を議論していきます。この本を通じて国際政治の読み解き方を学ぶと、現在の国際情勢をより深く理解できると思います。

☞小泉悠（2022）『ウクライナ戦争』（ちくま新書）

3 冊目は欧州の現状を扱った本です。2022 年 2 月 24 日は、国際関係史に残る日となりました。この日は、ロシアがウクライナに軍事侵攻した日です。それから 1 年が過ぎる 2023 年 2 月現在、ウクライナ情勢は解決の糸口さえ見えない状況で

す。ロシアによるウクライナ侵攻は大きな衝撃と影響を与えています。現在の国際社会に生きる人間は、この衝撃を受け止め、考え続ける責務があります。

この本は、ロシアの軍事・安全保障の専門家が、現在のウクライナ情勢の経緯をわかりやすいタッチで解説しています。この本を読むと、ロシアやウクライナで起きてきたことが正確にわかります。加えて、この戦争を通じて何を考えなければいけないのかという指針も与えてくれます。読み終えた後には、ウクライナ情勢をより深く理解できる自分に気が付くでしょう。SNS で流れてくる情報の浅薄さや信頼性の無さに笑ってしまうかもしれません。1 冊の本を読み終える前後で世界の見え方が変わる。1 冊の本との出会いはそういうものだと思います。

河原　伸一

☞城山三郎（1980）『官僚たちの夏』新潮文庫

私は、大学３年生の時に、この本に出会いました。本書は、その後の私の進路を決定したという意味において、私にとってまさに「運命の書」です。

☞グラハム・アリソン／宮里政玄(訳)（1977）『決定の本質ーキューバ・ミサイル危機の分析』中央公論社　➲原著: Allison, G.& Zelikow, P.(2nd Ed.) (1999). *Essence of Decision-Explaining the Cuban Missile Crisis*. Pearson Longman.

☞ハンス・モーゲンソー／現代平和研究会(訳)（1986）『国際政治―権力と平和』福村出版

学部の学生の時、この 2 冊を読みました。この 2 冊も私にとって「運命の書」となりました。国際政治学を専攻しよう、米国の大学・大学院で学ぼう、そして、大使館や国際機関で外交にたずさわり、世界平和に貢献しようと思うきっかけとなった本です。

川成　美香

☞井出祥子（2006）『わきまえの語用論』大修館書店

日本文化は「高コンテクスト文化」といわれている。日本語で的確に表現するのは、「場・コンテクスト」や「わきまえ」をいかに適切に認識するかにかかっている。日本文化と日本語のコミュニケーションを包括的に捉え、文化と言語の関わりを明らかにする語用論の入門書である本書は、英語と英語コミュニケーションを学ぶ学生には必読といえる。

☞直塚玲子（1980）『欧米人が沈黙するとき―異文化間のコミュニケーション』大修館書店

欧米人と日本人の間の異文化間のコミュニケーションで生じる誤解や疑問を、著者の実体験や豊富なインタビューなどに基づいて紹介し、その原因を文化的背景の相違に起因すると解明している。言葉そのものを重視する欧米人、言葉の裏にある言外の意を重視する日本人、「英語の発想」を知る原点ともいえる異文化コミュニケーションの 1980 年刊行の古典である。

☞土居健郎（1971/2001）『「甘え」の構造』弘文堂

「甘え」は日本人の日常生活にしばしば見られる感情だが、著者は外国にはそれに対応する適切な語彙がないことに気づき、カルチャーショックを受けた。フロイトの精神分析、ベネディクトの『菊と刀』、サピア・ウォーフの文化言語論などを比較検討し、「甘え」理論を構築、人間心理の本質を丹念に追究した。異文化コミュニケーションにも役立つ「日本人のメンタリティー」を解き明かす名著として、1971 年の刊行以来読み継がれている。

☞ルース・ベネディクト/長谷川松治(訳)（2005）『菊と刀―日本文化の型』講談社学術文庫　➲原著: Ruth Fulton Benedict. (2006). *The Chrysanthemum And the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Mariner Books.

第二次大戦中の米国戦時情報局による日本研究をもとに執筆され、後の日本人論の原点となった不朽の書である。著者のルース・ベネディクトは、日本人の行

動や文化の分析からその背後にある独特な思考や気質を解明し、日本人特有の性質や特徴を見事に浮き彫りにしている。“菊の優美と刀の殺伐”に象徴される日本文化の型を示し、その本質を洞察した、第一級の日本人論である。

☞塩野七生（1988）『マキアベェッリ語録』新潮社

浅薄な倫理や道徳を排し、ひたすら現実の社会のみを直視した中世イタリアの思想家・マキアヴェッリ。「マキアヴェッリズム」という言葉で知られる彼の思想の真髄を、塩野七生が一冊にまとめた箴言集。組織とは、人間とは、リーダーとは…何か。困難な時代を生き抜くためには必要不可欠で、現代にも通じる鋭い洞察の数々を知ることができる。

小谷　哲男

☞ポール・ジョンソン／別宮貞徳・訳（2001 年～2002 年）『アメリカ人の歴史 Ⅰ～Ⅲ』共同通信社

アメリカ合衆国の創出は人類最大の冒険である」ことに気づいたイギリス人の歴史家によって書かれた、アメリカではなく、“アメリカ人”の歴史。アメリカの歴史はたかだか 200 年少しと言われるが、多くの国の建国史が神話や伝説によって美化されている一方、アメリカ人は合衆国の創出の記録を、先住民の虐待や奴隷制度など、隠したいことも含めてつぶさに残してきた。本書は、16 世紀から 20 世紀の終わりまでのアメリカ人の歴史を膨大な史料に基づいて振り返り、アメリカ人の理想と現実の歴史に著者の主観による分析が加えられていく。ここまで赤裸々なアメリカ史の通史は他にないだろう。私も学生の時、本書を読んでアメリカへの関心をより強くした。アメリカ英語を身につけるためには、アメリカの社会や文化も理解する必要があるが、本書は日本の学校教育で学ぶアメリカ史とは違う見方を提供し、みなさんのアメリカ理解をさらに深めるだろう。

☞ジョセフ・S.ナイジュニア、デイヴィッド・A. ウェルチ／田中明彦、村田晃嗣・訳（2017 年）『国際紛争：理論と歴史原書第 10 版』有斐閣

ソフトパワー論で有名な著者が、元々はハーバード大学の 1 年生のために書いた国際関係論の入門書だが、現在では世界中の大学で教科書として使われている。入門書とは言っても、国際関係論の理論や概念を丁寧に解説していくものではなく、理論や歴史を使って国際政治を考えるアプローチの見本を示しているため、初心者にはやや難解だ。いきなり古代ギリシア時代のペロポネソス戦争から説き起こしているため、少なくとも歴史に一定の知識がないと読み進めることはたやすくはないだろう。原書の英文も読みやすいが、和訳版は日本を代表する国際政治学者が訳しており、和文でも読みやすい（実は私も下訳を担当した）。私は国際会議で著者と一緒になることがあるが、その鋭い分析にはいつも感銘を受ける。国際関係論に関心のある人には、ぜひナイ教授がどのように国際政治をみているのか、本書を通じて知ってもらいたい。

☞高坂正堯（2008 年）『海洋国家日本の構想』中公クラシックス

本書は、戦後日本の論壇に現実主義の立場から貢献し、多くの弟子も輩出した著者の初期の論文集。著者の論壇デビュー作である「現実主義者の平和論」から、本のタイトルとなっている「海洋国家日本の構想」など1960年代に書かれた7本の論文が掲載されており、日本で国際関係・国際政治を学ぶなら必読書だ。今からおよそ 50 年前の論文集とはいえ、今日の日本、アジア、そして世界を考える上で多くの示唆を残している。特に、「海洋国家日本の構想」は、西洋でもなく東洋でもない日本の針路を示すものとして、学者・研究者だけではなく、政治家・官僚の間でも高く評価されている。私も、この論文に刺激を受けて、（遅れに遅れてはいるが）新書を執筆中。みなさんにも、ぜひ日本の現実主義学派の原点に触れてもらいたい。

☞石黒桂（2020 年）『段落論：日本語の「わかりやすさ」の決め手』（光文社新書）

本書は、文章を読み書きする際の段落の重要性に注目したユニークな内容となっている。文章を書くことを「引っ越し」にたとえ、部屋に散らばる様々な小物をそのままトラックに載せるのではなく、衣類、食器、文房具など、種類別にラベルを貼っ

て段ボールに詰めれば効率的な引っ越しができるが、ラベルを貼って段ボールに詰める作業が、頭の中にある文を段落という段ボールに整理することと同じだと本書は指摘する。これは日本語だけでなく、英語にも当てはまることである。授業のレポートを書く際にはもちろん、英語のリーディングやライティングにも本書は役立つだろう。

小林　裕子

私が偏愛♡する珠玉の三冊！

☞E.H.カー/井上茂(訳)（1945）『危機の二十年―国際関係研究序説―』岩波現代新書

ページを手繰るたびに国際政治の目指すべき方向を示し、大きな感動を与えてくれる珠玉の一冊です。表紙をめくると先ず、「来るべき平和建設者のために」。そのページをめくると「哲学者は想像の国家のための想像の法を作る。したがって、彼らの説くところは、きわめて高いがゆえにほとんど光明を与えぬ星のたぐいである」とあります。国際政治における、平和指向、現実主義、そして高邁な思想の大切さを説く、私の本棚の特等席に凛と座す一冊です。

☞Drucker. P. F.(2004). *The Daily Drucker 366 Days of Insight and Motivation for Getting the Right Things Done*. Harper Business.

一日一言、366 日分のドラッカー教授の示唆に富み、元気が出る言葉が綴られています。ドラッカー教授は現代経営学の分野に哲学の思想をもちこんだ大きな功績を持つ方です。経済の本質をマネーゲームと誤認し、会社の構成員を単なる駒と考えがちな現代の経営学の流れに対して、大きな方向修正の必要性を示唆する偉大な思想家のことばがあふれ出てくる、とても素敵な一冊です。表紙の砂時計の写真が、なんとも深い味わいを醸し出しています。私が 2 番目に尊敬する人物です。2 番目に尊敬する人は私には 20 人程いますが. . .

☞小林秀雄（2005）『小林秀雄対話集』講談社文芸文庫

私が 2 番目に尊敬する小林秀雄先生の著書の全てが私の心を捕えて離しません。小林秀雄先生の著書は次のページに進むのが楽しみすぎて、先に進むのがもったいなくなるような面白さです。私が誰にも負けない「批判精神」を持って社会を見ていること、「美しさ」に絶対的な価値を置くことは小林氏の思想から大きな影響を受けているからにほかなりません。本当の「美しさ」とは何か、については小林秀雄先生の著書から読み取ってください。私は小学生のころから小林秀雄先生の著書の読後感想を、私が一番尊敬する人と語り合うことが大好きでした。私は、私が一番尊敬する人のために全力で毎日を生きています。

《大学生が教養として読むべき本として、以下 3 冊を追加推薦しておきます。》

☞山口二郎（2019）『民主主義は終わるのか』岩波新書

数に頼ることが民主主義ではありません。山口二郎（法政大学教授）は、「民主主義を担う市民に必要な美徳は、正義感、正確な認識、楽観と持続性である」と述べています。地球市民として心に留めるべき大切な言葉です。

☞原田國男（2017）『裁判の非情と人情』岩波新書

多くの逆転無罪判決を出した元裁判官のエッセイが集められています。軽妙ですがその内容は深く心を揺さぶります。2017 年にエッセイスト賞を受賞したベストセラーです。

☞福沢諭吉（齋藤孝訳）（2008）『現代語訳　学問のすすめ』ちくま新書

原本は約 150 年前に福沢諭吉によって書かれたものですが、齋藤孝によって読み易く紹介されています。明治の初頭に紡がれた言葉は令和の時代に益々輝きを放っています。

松井　順子

☞Mark Twain/ Guy Cardwell(Ed.). (1986). *The Adventures of Tom Sawyer*. Penguin Classics, Penguin Books.

This is a book about a young boy, Tom, who lives with his Aunt Polly. Tom represents the constraints and conventions of this world – a boy who wants to break free, but remains within the confines of the world he was born and raised in. His antithesis, Huckleberry Finn is the epitome of freedom and at the same time, he represents the reverse side of that coin: poverty, anxiety, and an unstable life – the other side of freedom which Tom probably does not fully see. In an imperfect world, "freedom" is never complete. Pick and choose - the limited "freedom" of a comfortable traditional life - Tom's freedom, or the "freedom" to ignore society, and pay the penalty - Huckleberry Finn's freedom.

☞Lewis Carroll. (1865/2000). *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking Glass*. Signet Classic. Penguin Books. [paperback]

This story about a girl who falls into a hole into a different world, changes our perspective on life. Alice tries to apply the book learning from school in this new world, but nothing works. She grows, then shrinks, and goes through a range of wild experiences. Here, none of the "conventions" of normal life apply. Big ... small ... right .. and wrong ... are all reversed. Despite the ridiculous setting and the ridiculous story, *Alice in Wonderland* continues to inspire and captivate audiences of all ages and walks of life, reminding us that much of what we take for "normal" could simply be a matter of perspective.

注:上記の本に関連して、下の CD, DVD も図書館に揃えました。

☞ Lewis Carroll. Alice in Wonderland CD Pack (Book & CD). Penguin Readers Simplified Text.

☞ Alice in Wonderland (Book of the Film) Tim Burton、 Linda Woolverton Puffinbooks. Penguin Books. Disney Enterprises.

☞ アリス・イン・ワンダーランド [DVD] 出演 ジョニー・デップ、ミア・ワシコウスカ、ヘレナ・ボナム=カーター、 アン・ハサウェイ (DVD – 2010)

妻鹿　裕子

☞結城英雄（1999）『「ユリシーズ」の謎を歩く』集英社

『ユリシーズ』は二十世紀を代表する文学作品でありながら、多くの人が読むのを途中で諦めてしまう難解な作品としても知られています。日本のジョイス研究を牽引してきた結城英雄先生は、ジョイスが『ユリシーズ』に埋め込んだ謎を明らかにしながら、アイルランドの文化や歴史について教えてくれます。研究書として、また『ユリシーズ』の入門書として、どんな人が読んでも新しい発見がある本です。結城先生の本を手がかりにすれば、『ユリシーズ』の面白さが理解できるのではないでしょうか。

☞鈴木道彦（2007）『異郷の季節（新装版）』みすず書房

プルーストの『失われた時を求めて』の個人訳で知られる鈴木道彦先生による回想記です。ごく限られた人しか留学できなかった 1950 年代、フランスに留学された鈴木先生ご自身の経験やフランス文学、思想に関して考えられたことなどがまとめられています。本書には、フランスでの生活や有名な作家から市井の人にいたる人々とのやり取りが、いきいきと描かれています。鈴木先生は偉大な研究者・翻訳者ですが、エッセイや講演も非常に魅力的です。鈴木先生の六つの講演を基にした『余白の声　文学・サルトル・在日―鈴木道彦講演集』(閏月社)もお薦めです。

☞アドリエンヌ・リッチ／大島かおり訳（1989）『血、パン、詩。』晶文社

本書は詩人でありフェミニスト批評家でもあったアドリエンヌ・リッチの論集で、1979 年から 1984 年に発表された論文、書評、講演をまとめたものです。本書の冒頭を飾る「女は何を知る必要があるか」はスミス・カレッジという女子大学の卒業生に向けられたスピーチですが、学びとは何か、教育とは何かを考えさせられる内容になっています。リッチの著作を読めば、ものの見方が 180 度変わり、大学での学びも変わってくるはずです。学生の間に是非読んでほしい一冊です。

Keiko Nakamura

☞Shel Silverstein. (1976). *The Missing Piece*. HarperCollins.

For students studying a foreign language, there is nothing more satisfying than being able to read a meaningful book from cover to cover. The fact that this book has simple pictures may make it seem like children' s literature; however, its message is a powerful one which can be appreciated by readers of all generations. On the one hand, it is a story about unconditional love and selfless generosity; on the other hand, it is a sad lament about the passage of time, in which a boy goes from childhood to old age.

☞Jean Aitchison. (2008). *The Articulate Mammal*. Routledge.

This introduction to psycholinguistics has been a classic in the field for almost 40 years. Aitchison explores many interesting controversies in the field: What is language? Do animals have language? How do children learn language? Is language innate or learned? How do babies prepare for language? How do we understand and produce speech? What happens when language breaks down? In addition, she discusses several new state-of-the-art topics in the field, such as language and evolution, as well as the possibility of a "language gene." This is an excellent and easy-to-read text, filled with interesting examples.

☞Roger D. Hock. (2015). *Forty Studies that Changed Psychology: Explorations into the History of Psychological Research*. Pearson.

This book is a wonderful glimpse into the wonders of psychology, exploring the complexities of human nature. It covers 40 classic studies, presenting the research and results of the most famous studies which have greatly influenced the field of psychology. It presents studies on learning, cognition and memory, intelligence, personality, motivation and emotion, as well as social psychology. Each reading is relatively short, but packed with information and ideas which will make you eager to learn more about the human mind and behavior.

嶋田　珠巳

☞梶茂樹／中島由美／林徹編（2009）『事典 世界のことば 141』大修館書店

世界 141 の言語について、基本的な言語情報、簡単な挨拶・表現例、お薦めの本や信頼できるウェブサイト、さらにその言語を話す人々の暮らしが紹介されている。現地で調査を行っている日本のフィールドワーカーが執筆しているので、なまの情報が得られます。

☞真田信治（2001）『方言は絶滅するのか　自分のことばを失った日本人』PHP新書

私たちの普段の会話にみる方言と標準語の混交、アクセント型など、自らの言語使用について内省とともに考えることのできる本。方言ないし言語の消滅、方言の変容と変化の動態、方言と教育といったトピックについて深く考えたい人にもそのきっかけを与えてくれそう。

☞ルイ＝ジャン・カルヴェ/砂野幸稔ほか訳（2010）『言語戦争と言語政策』三元社

カルヴェはチュニジア生まれ、フランスの社会言語学者。原著が出版されたのは 1987 年とずいぶん前ですが、当時の論考は色褪せないどころか、いま言語学が取り組むべき課題を明るみに出します。言語の社会的側面がいかにして言語内部にはたらきかけるのか。たとえば第 9 章「言語の死」における、ボリビアのケチュア語がスペイン語との言語接触をうけてどのようになっていくかの記述は、その考察のお手本的実践。

☞嶋田珠巳（2016）『英語という選択―アイルランドの今』岩波書店

アイルランド英語をめぐる自分の研究のことを書いた拙著。みんなの感性に触れて、引っかかったところ、好きな章をぜひお聞かせください。著者の「英語学特講Ⅲ」も合わせてどうぞ。

☞嶋田珠巳・斎藤兆史・大津由紀雄編（2019）『言語接触―英語化する日本語から考える「言語とはなにか」』東京大学出版会

言語接触（language contact）の深みに 12 名の著者が誘います。これから日本語はどうなっていくのか、英語とどうつきあうのかといった問いを真剣に考えたい人が読むといい本です。いや、それ以上かも。ちょっと見てみて。

辰己　雄太

☞佚斎樗山（著），石井邦夫（訳注）（2014）『天狗芸術論・猫の妙術　全訳注』講談社学術文庫

天狗と猫が出てくる物語をまとめた短編集です。どういうジャンルに分類したらよいか難しいですが、あえて言うなら武道についての秘伝書でしょうか。ただ、武術や剣術に限った話ではなく、本の内容を抽象化して、他のいろいろなことに関係するお話として読めると思います。私も研究者として、影響を受けた部分があるかもしれません。物語の内容は、ぜひご自身で確かめてみてください。

本の内容とは関係のない話ですが、今、Google Translation に「彼は天狗になっている」と入れると、"He is a tengu."と訳されました。間違いではないですが、「天狗になる」は多くの場合、この意味では使われないでしょう。英米語学科の皆さんは「天狗になっている」を英語で説明できますか？

☞J.D. サリンジャー（著），野崎 孝（翻訳）（1974）『ナイン・ストーリーズ』新潮文庫

サリンジャーの短編集です。サリンジャーと言えば『ライ麦畑でつかまえて』が有名かもしれません。もしかしたら、名前くらいは聞いたことがある人もいるでしょうか。この短編集に収録されている物語は、どれも独立しているので、必ずしも全てを読む必要はありません。それぞれのタイトルを見て、気になった物語だけを読んでも、問題ないと思います。

私はアメリカのコネチカット州に五年ほど留学していたので、この本に収録されて

いる「コネティカットのひょこひょこおじさん」という作品に特に思い入れがあります。初めてこの物語を読んだのは留学する前でしたが、実際にコネチカット州で生活してから「コネティカットのひょこひょこおじさん」を読み返すと、物語により親近感を持てるようになりました。どんなことがきっかけになるかわかりませんが、学生の皆さんも、ぜひお気に入りの物語を見つけてみてください。

翻訳版ももちろん良いですが、英米語学科の学生の皆さんは、よければぜひ一度、英語のものに挑戦してみてください。たとえ同じ桃太郎でも、アナウンサーが話すのと、落語家が話すのとでは、だいぶ印象が違うはずです。それと同じことが、日本語と英語でも起きるかもしれません。

☞土屋賢二（著）(1997)『われ笑う、ゆえにわれあり』文春文庫

哲学をご専門にされている土屋賢二先生が執筆された、ユーモアエッセイ集です。私は、人前ではこの本を読まないようにしています。別にこの本を読んでいることが恥ずかしいわけではありません。読んでいるとついつい笑ってしまいそうになるので、その様子を人に見られたくないからです。面白いという感覚は人それぞれ違いますが、学生の皆さんもこの本を読む時は、念のため、声を出して笑っても問題ない環境を確保してからにしたほうがいいかもしれません。

この本に出てくるユーモアの手法は、日本ではあまり一般的ではないかもしれません。しかしこの種類のユーモアは、文化的背景知識がなくても理解しやすいので、海外の人たちと話をするときに、利用できる機会が多いように思います。例えば、日本の漫才を単純に外国語に翻訳しただけでは、漫才という文化を知らない外国の方には、その面白さがなかなか伝わらないかもしれません。それに比べると、ユーモアはセンスを磨いておけば、文化の枠を超えて通用しやすいはずです。私は文化史などについては全くの素人ですが、ユーモアという手法の有用性を感じる経験が、アメリカ留学中に何度かありました。英米語学科の学生の皆さんも、ユーモアというものを知っておいて、損はないと思います。

梅谷　博之

☞幸田露伴(原著)・渡部昇一(編述) (2007)『幸田露伴の人生哲学名著『努力論』―小さな努力で大きく報われる法』三笠書房

1912 年に出版された幸田露伴の『努力論』のエッセンスを紹介した本です。「小さな努力で大きく報われる」というキャッチコピー的な文言が題に含まれていますが、安易なハウツー本ではありません。仕事や目標の達成のために心掛けるべき重要なことが書かれてあります。

現在この書籍は絶版になっていますが、自治体の図書館などで借りることができると思います。あるいは、幸田露伴の『努力論』を紹介する本はこの本以外にもいくつかありますので、それを読むのでもよいと思います。

☞桑田真澄 (2010)『心の野球―超効率的努力のススメ』幻冬舎

私はプロ野球は観戦しません。ですので、著者については「有名な野球選手」という程度の認識しかありませんでした。ある日のテレビ番組で、著者が引退後に指導者として活躍している様子を紹介していました。それがきっかけとなってこの本を手にしました。

本のタイトルが示すように、努力、それも合理的・効率的な努力の重要性を筆者は説きます。他にも、周りの人への感謝を忘れないこと、「試練」を自分を磨く砥石と考えるべきことなど、筆者のさまざまな考えが体験談とともに書かれてあります。

こうした心がけを持つことの大切さは皆さんもすでに知っており、その意味では新しいことは書かれていないかもしれません。しかし実行することは難しいものです。筆者はそれを実行してきました。そうした著者の文章を読んで、私は自分の甘さを痛感しました。野球好きの人に(そしてそうでない人にも)お勧めします。

☞和田秀樹 (2008)『「グズ」の習慣が直る本』新講社

私は「グズ」です。それを少しでも直したいと思ってこの本を読みました。筆者は「多くの場合、「グズ」というのは、能力というより、性格や心理学的な問題なのです。だから、ちょっとだけ考え方ややり方、あるいは生き方を変えるだけで直ることがほとんどです」と述べています(まえがき 5 ページより)。

この本には「グズ」から抜け出すいくつかのヒントが書かれてあります。自分の「グズ」を何とかしたいがどうすればよいか分からない人は一度読んでみてはいかがでしょうか。

この書籍も（最初に紹介した『幸田露伴の人生哲学名著『努力論』』同様）現在では絶版になっています。電子書籍では読めるようですが、紙媒体で読みたい人は自治体の図書館などで探してみてください。

横溝　祐介

☞森毅（1991）『エエカゲンが面白い』ちくま文庫

「大学生」にふさわしい本を一冊ご紹介いたします。私が大学生の時に、よくブックオフで文庫本を買いあさっていました。この本も 100 円で買った文庫本でした。著者は数学者で社会的にも有名な人物ですが、私の世代では知らない人の方が多いと思います。学生のみなさんならなおさらでしょう。この本の中の「大学サボリ道入門」の部分を読んでいると、学生時代は心が落ち着いきました。就職して教員になった時は「評価について」が役に立ちました。今は「新入生への私的オリエンテーション」を読み返しています。著者の関西弁が聞こえてくるような、読みやすい一冊です。

☞養老孟司（2010）『身体の文学史』新潮社

「文学」についての本を一冊ご紹介します。思春期は「自分」というものに悩みがちですが、私はこじらせてしまっていてしばらく悩みました。その答えらしいものを見つけられたのは、養老氏の本をたくさん読んだからだと思います。著者は学生時代「心理」の勉強を志したが、「解剖学」つまり「身体」の研究をすることになった人物です。この本では「文学」における「身体」を取り扱います。内容として「身体」を扱えば自然と「こころ」や「心理」も扱うことになります。さらに「社会」的には禁忌とされそうな話題を文学だからこそ扱っている、そんな作品にも触れているスリリングな一冊です。

☞福岡伸一（2012）『せいめいのはなし』新潮社

「言語を多角的に考えてみたい」そんな学生さんのために、一冊ご紹介します。この本は私が学生時代に、お世話になっている大学の先生に買ってもらった思い出の本です。「動的平衡」で有名な著者と数名の方々による対談本で、話題は多岐に渡ります。それぞれの「生命現象に対する目線」がユニークで面白く、話題も多岐に及びます。私は動的平衡という考え方も「英語」を理解する、特にいくつかの文法を理解しイメージを広げる上で、とても示唆に富んでいると考えています。

Recommended Reading for Eibei Students (Ver. 13)
Edited by Eijiro FUKUI
Published by Department of English,
Faculty of Languages and Cultures,
Meikai University, March 2023

Recommended Reading for Eibei Students, Ver. 13
英米語学科推薦図書 2023